



元結研究

著者	加藤 敏
発行年	2020
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102乙第2948号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00161077

氏 名	加藤 敏
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2 9 4 8 号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	元結研究

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	小松 建男
副 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	谷口 孝介
副 査	筑波大学 准教授	博士（文学）	稀代 麻也子
副 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	井川 義次

論 文 の 要 旨

本論文は、唐代の社会派の文学者である元結（719~772）について、その文学を特徴づけている諷諭の表現と尚古的文学観、怪奇な水石への志向をあきらかにし、彼を盛唐期の諷諭の文学者として位置づけるものである。

第一編においては、元結における諷諭の文学の成立とその特色を明らかにする。第一章では、「元魯県墓表」を取り上げ、尊敬する族兄元徳秀の生き方を称揚し、自らも、世俗を戒め、感化したいという強い意志を表出していると指摘する。第二章では、「自述三篇」を取り上げ、純朴さや方正忠信といった価値が通用しなくなったことを知りながら、なおそれを守るという「愚愚者」（愚の愚なる者）として生きることを選択したと主張する。第三章では「愚愚者」の視座の獲得が寓言の傑作を生み出したことを明らかにする。第四章では、「引極三首」と「演興四首」を取り上げ、これらの作品に王朝に対する強い求心的な敬慕の心情が表出していることを明らかにする。第五章では、「説楚賦三篇」を扱い、為政者との邂逅の願いを作品において実現させており、ここにも王朝への強い求心性が表出しているという。第六章では、「系楽府十二首」を取り上げる。元結にとって楽府は自らと君主を結ぶものであり、自らの誠意を明らかにし、君主を動かすことができる契機となりうるものであって、王朝への強い求心的心情が見られるという。

第二編では、在官時の作品を取り上げ、元結における諷諭の文学の展開を検討する。第一章では、元結が不遇な詩友たちのために編纂した『篋中集』を分析し、そこに選ばれた作品が、やがては為政者に届けられて嘉納され、評価を得てほしいという願いが込められていると主張する。第二章では、元結の代表作とされる「大唐中興頌」と「時議三篇」を扱う。この頌には、李林甫や楊国忠が国権を弄んだことによって国家が崩壊したものの、肅宗のもとに人々が糾合し、両京を回復したことが述べ

られ、賞罰が当を得ていることを称えた作品であるが、これより二年前に制作された「時議三篇」を見ると、王朝が上下ともに安逸に流れ、賞罰も当を失し、危機を忘れているとし、中興を期していた時を思い起こすように訴えていると指摘し、「大唐中興頌」は、かつての中興を称美し、それと対置される現在の状況を浮かび上がらせ、李輔国のごとき奸臣を除き、君臣が心を一つにし、賞罰が当を得るように訴える諷諭の作として解釈することができると主張する。第三章と第四章では、「春陵行」「賊退示官吏」の二編とこれを読んだ杜甫の反応を扱う。「春陵行」は、元結が道州刺史着任後奉った「謝上表」・「奏免科率状」と補完しあう関係にあり、二編の上奏文の内容をより効果的に伝達する役割を果たしているのに対し、「賊退示官吏」は、道州の官吏たちに自らの胸懷を示した作であり、厳しい徴税に対する憤りをもって、州民を憂えることを知らぬ官吏に対峙した時に成立した詩であり、「春陵行」のごとく、楽府として嘉納されることを意図したものではないという。杜甫は「春陵行」・「賊退示官吏」を得ると、「同元使君春陵行」を作って唱和し、この二編を「比興体制」「微婉頓挫」の作として称え、元結を王朝の官吏として称揚するとともに、彼自らの内に王朝への強い求心性を確認し、詩家としての営みを積極的に展開して行くことになるが、元結の比興の体制にならうことはせず、「夔府詠懷四十韻」のような、最も技量を求められる排律の形を用いて「春陵行」と同様の心情を吐露することになると、両者の相違を指摘する。なお「春陵行」序には漫叟という号が用いられているが、これは、法律や制度、慣習に従い、それを維持しようとする王朝の中枢にある官吏に対して、荒浪なる者として対峙する意味を込めたものであり、「春陵行」は、この漫叟の視座によって著されていると主張する。

第三編では、元結における怪異な水石への志向の意味を解明する。第一章では、初唐における水石の描写を取り上げ、この時期には非日常的で格別に素晴らしいことをいう「奇」を評価用語として使い、元結のように「怪」と評価する例はほとんどないことが確認される。第二章では、元結の怪異な水石への志向を取り上げる。元結は、晩年の浯溪退隠時期になると自然の景物を題材とした詩や記銘の類を多く制作し、洞穴や凹状の岩石を題材として「異」「殊」「怪」といった語で形容するようになるが、彼の描く水石は、あまりの怪異さゆえに天下の景勝としての価値を知られることなく、世に忘れ去られているものであり、世俗と合致しない価値観を持つ元結自身も、自らを時流とは異なる存在と位置づけ、怪異な水石のたたずまいと重ね合わせているという。元結は「春陵行」「賊退示官吏」以後、諷諭詩を制作していないのであるが、このような怪異な水石を主な題材とした作品、特に銘は、諷諭の意識に基づいて制作されており、水石の価値を世に顕彰することによって、世俗を戒めようとする規諷の意識が顕著に現れていると主張する。第三章においては、浯溪に彼の代表作である「大唐中興頌」が刻されたことの意味を検討している。著者は既に第二編第二章において、「大唐中興頌」が諷諭の作であることを論証しているのであるが、本来退隠後の自適の空間であるはずの浯溪に諷諭の作である「大唐中興頌」が刻されたことから、浯溪という自適の空間は世俗との対峙において成立しており、彼はこの自適の世界を称美することによって世人を戒めようとしているのであると指摘する。そして晩年の元結にとって諷諭は単なる方法だったのではなく、表現者元結のうちに深く内在化していたのであると主張する。

最後に結章を設け、晩年の怪石を題材にした作品が、諷諭によって世俗に対する忠告や戒めの意を尽くすことで憂憤や不遇感を癒やし、安らぎをもたらしていたのが彼の文学の営みの最終形態であり、元結の諷諭の文学の到達点であって、こうした諷諭の文学の在り方は、例えば中唐の白居易のそれとは異なるものであると主張して結論とする。

審 査 の 要 旨

1 批評

唐代の文学者元結は、君主に対し政治上の問題点を指摘し諷める諷諭の作品を多く残しており、社会派の文学者と位置づけることが一般的である。ただし、その晩年の詩文は、自然の景物、特に奇怪な形状をした水石を題材としたものが多くなり、表だって社会を批判する作品を作らなくなる。このような詩風の変化は、一見したところ白楽天・元稹ら中唐詩人の諷諭と閑適という構造に類似しているため、盛唐を代表する詩人杜甫とほぼ同時期に生きていたにもかかわらず、中唐の詩人として扱われることが多い。

本論文は、元結について、社会と彼の実人生との関わりにおいて、その文学の形成と発展のあとをたどり、諷諭という視点から統一的に解釈・説明し、盛唐の文学者として学史中に位置づけることに成功したものと高く評価することができる。

著者は、元結の作品中に見られる諷諭表現がどのように発展したのかを、元結の経歴に即して明らかにするという方法を取り、退隠後の住処に選んだ浯溪は、元結にとって自らの心を癒やす閑適の場としてのみではなく、世俗世界と対峙する空間として機能しており、そこに見いだした怪石を題材とした作品も諷諭の意図が込められているのを明らかにしたことは従来の通説の見直しを迫るものとして評価できる。

また、本論文はどの章も、常に広く内証（元結の他の作品）と外証（同時代の文献など）とを求めた上で先行諸説を子細に吟味し断案を下しており、提示された解釈は揺るぎのないものということができる。たとえば元結の文学者としての姿勢は、族兄元徳秀の影響があることが知られているが、著者は唐一代の元徳秀に言及した詩文と元結の「元魯公墓表」を比較し、元結のみが元徳秀の清廉潔白で強い意志を貫いた生き方を重視している点に元結の文学者としての出発点があるということを明らかにしたことは、その特に優れた成果であるといえる。また、元結の代表作「大唐中興頌」は、中興を称賛した作品か皇帝に対する批判を含む作品か解釈の分かれる作品であるが、時代背景、元結の同時期の作品、頌という文体の性格から諷諭の作であるとする著者の主張は、説得力を持つ。

このように本論文は、元結という文学者を、豊富な資料と丁寧な作品分析を通して盛唐文学の中に位置づけることに成功しているのであるが、白楽天・元稹など中唐の文学者における諷諭と閑適との相違についての検討は、さらに深める必要があるであろう。しかしながら、これは今後の著者によるさらなる探求に期待すべきものであり、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

2 最終試験

令和2年1月23日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。